

---

# モノクロxリンク

Asakkyo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モノクロ×リンク

### 【Nコード】

N2124Z

### 【作者名】

Asakkyo

### 【あらすじ】

平凡な人生に飽き飽きしていた高校生・山田ヒリュウは、ある日、白と黒の二色で創造された王国　モノクランスに迷い込む。モノクランスホテルで彼を待っていたらしい少女・モノックはどうやら彼を気に入ったらしく、彼を護衛にしようとする。眠れない夜におすすめな壮絶バトルファンタジー。

## プロローグ

その昔、現世を出た先にそれはそれは巨大な四角い透明な箱があった。何も入っていない箱。

その箱は、やがてある神に見つけられ、新たな世界を入れられた。

箱の中に創造された新たな世界には、名前が付けられる。創造主である神　モノクレイは考えた。

「黒と白で出来た世界を創造したんだから……、モノクランスが良いだろう」

後に、住人5000万の王国が出来、繁栄していくそれは、こう名付けられた。

神・モノクレイが創造した新世界　モノクランスと。

## 第1章 001（前書き）

第1章 001～第1章 002の書き出しぐらいまで書きます。  
他の作品より読みにくい構成ですいません；；

## 第1章 001

### 第1章

あの日の夜。少年・山田ヒリュウはいつも通りにテレビの電源を入れて、好きなアイドルのニュースだけチェックして、いつも通りにお気に入りのiPodで好きなアイドルの曲をヘビロテして、お気に入りの雑誌を読んで休日の服装を考えて、クラスメイトで僕の片思いのあの子とデートする自分の妄想をついでにして……。そんな日常を謳歌していた。

彼は、その後どうしたかは忘れた。気付けば、ここに居たのだ。モノクランス王国の中に。

彼・ヒリュウは、とりあえず、ペしゃんこになったスライムの如く地面に寝そべっているその体を起こして、辺りを見回してみる。振り向けば、そこには見た目17〜18階建ての外側の全ての面を灰色で塗りつくされた ひよろ長い建物が。

（ここはいったい？）

目を凝らしてじつと見つめる。表には、【モノクランスホテル】とある。

しばしじつとそのホテルを見上げてぽかんとしていると、白いスーツを着た男の人に声をかけられる。

「君が……、山田ヒリュウくんだね？」

優しげに尋ねてくるあたり、この人はきっと紳士に違いないと思ったヒリュウは、素直に答えた。

「はい」

老紳士はにこりすると、僕をホテルの中へ連れて行く。ロビーに来ると、老紳士はヒリュウに深々とお辞儀をすると、どこかへ立ち去る。

ヒリュウはロビーに置かれた高級か否かのいまいち謎なグレーのソファに座り、居眠りをする。

その数分あとだった。

「あ」ヒリュウの背後で、聞いた感じでは16歳ほどの少女の声が。

「んみゃ……？」薄目を開け、声のした方を見る。

「やっぱりそうよ！」少女は、ヒリュウの背中に向かって何やら叫んでいる。

少女はヒリュウの座るソファに向かって走ってくる。距離にして25センチのところで立ち止まる。雪のように白い肌、線の細い容姿、とりわけヒリュウの目を引き付けるのは銀色の大きな瞳。ホテルの証明の光に反射して輝く銀色の美しい。

「貴方が、山田ヒリュウくんなのねえ？」目をキラキラさせながらこちらを見つめ、さっきの老紳士と同じことを聞く少女。

「そうだけど、何か？」ヒリュウは答えた後に悔しそうな顔をする。

今のでは好感度ガタ落ちじゃないか。感情をストレートに出してろくなことの無かった僕のこれまでを思い出し、更にガツクリした。

「やっぱり、貴方がヒリュウくんだったのねえ！」

頭を抱えてうずくまる少年の様子なんて華麗にスルーするどころか、少々馴れ馴れしい呼び方をしてくる彼女。少年はきつところ思っただろう。

何なんだコイツは。

ヒリュウと少女はエレベーターに乗り、グレーの27階まで上がる。

ヒリュウが、エレベーターのボタンを見てみると、少女が微笑む。後々、ヒリュウが名前を聞くと、少女はモノックというそうだ。

「初めて来たんだよね。あとでこの世界について詳しく説明してあげるわ。そのために、さっきの紳士に地図を用意させたんだもの」ヒリュウは、そっか、と軽く頷いた。

グレーの27階に着いた。

エレベーターの中の壁やボタンも扉も全てそのようだが、白・黒・グレーの三色しか使われていない。それはエレベーターを降りても同じで、床もドアも壁も天井も、照明も、この3色で統一されている。昨夜までは、赤や青やピンク、オレンジに緑、金とありとあらゆる色を無意識に、日常的に見ていたヒリュウにとって、このモノクロな世界はとても異様なものに見えたはずだ。

「不思議でしょ？」

ヒリュウの前を歩くモノックが笑う。

「君の説明を早く聞きたくてワクワクしてるよ」

「いったい、どうなってるんだこは……？早くこの世界のシステムとか誰が創造したのかとか、知りたいな……」。

彼の歩くスピードが早くなる。

しばらく歩いた先に、その部屋はあった。ドアの色はグレー。早速、モノックが開けてくれ、先にヒリュウを中へ入れる。

「すげえ……。僕、色んなホテルに泊まってきたけど、ここまで地味な部屋は初めてだ」

あれ……？僕、変なこと言った？モノックの顔が引き攣って見えるのは何故なんだろうなあ。

「……まあいいわ」モノックの表情が変わる。

「説明を始めるわ！いい、しっかりと聞くのよ？一言も聞き逃してわいけないんだからね？いいかしら？」

人差し指を真っ直ぐこっちに向けて言うなよ。あ。……そうだ。ちょっと閃いたから、聞いてみるか。

「あのさ、もし一言でも聞き逃したら、僕、どうなっちゃうの？」  
即答だった。

「教授の話によれば、この世界で死ぬことになっちゃうらしいわよ。でも、貴方なら大丈夫だと思うわ。モノクロタワーに上れるのは貴方ですもの」

最後の言葉、意味深だな。

「ていうか、早く説明しろし……」

待ちきれねえ。早くこの世界について知りたい。

「あ。ごめんごめん。では、始めるわ」

モノツクの口から、この世界が語られる――。

## 第1章 002

「この王国が出来たのは、その世界が創造された後なの。王国の始まりはね、一人の少年と一人の少女がお互いを好きになって大人になった時、王・妃になることを前提に神・モノクレイが二人を結婚させたのよ。そこまでは良かった」だんだん、モノツクが暗い顔になる。

何だよ、怖いじゃないか。

「けど、何かあったの？」

「良かったんだけど……、結婚してすぐの頃、二人は色の話で喧嘩をしてしまうの」

「喧嘩……？」

モノツクが頷く。

「そう、喧嘩をしてしまうの。この発端は、当時の王国の色についての話し合いなんだけれどね。その頃は白と黒しか色が無かったの。ある日、王が王国を白一色にしないかと妃に提案したの。もしたら、黒好きな妃が怒ってね……。やがてそれは王国一のニュースになって、ついに国民が色のことで戦争を始めてしまうの。これは後にモノクランス戦争といわれる、未だに続いている争いごとなのよ。これはね、白の領域に住む白の住人と、黒の領域に住む黒の住人が、白を好む王のために、黒好きな妃のためにお互いの土地の面積を少しでも広く取ろうという思いから始まったの」一呼吸おいて、続きが話される。

「国民の争いが始まってしばらく経った頃、王と妃は国民の争いに心を痛み、王はやはり二色にしようと改心したの。そしたら、妃が白と黒の境界線を決めようって言い出したの」

そんなの、どうでも良くないか？と、僕は思うけど。

「王はね、そんなの決まる分けないって言ったの。でも妃は決めたって言うの」

また喧嘩か……。

「今度は解決したわ。妃の、グレーという白と黒を混ぜた色を新たににつくってそこに境界線を引こうっていう案だね。」

なんだそりゃ……。始めからそうすりゃ良かったんじゃないか。

「でも、土地の争いは無くならないのよねえ……。無くなるどころか、あなたの世界で昔起きていたことが、こちらでも起きるようで……」

「どうしたんだろうねえ？」

エレベーターに乗った時から、何となくは気付いてたけど。

「白の領域に住んでる者は家の屋根からテレビ、ラジオ、文字まで何もかも白に統一しなければならないという白の領域条例と、黒の領域に住む者は何もかも黒で統一しなければならないという黒の領域条例ってというのが出来たのよ」  
ホワイトドメイン  
ブラックドメイン

「誰がそんな条例を……」

「国民の間で何十年と続く戦争を見てきた王と妃よ」

色のことでそんなに長いこと争うなんて……呆れてものも言えないよ僕は。そもそも、争いなんて起こるのがおかしいんだ。この国には譲り合いの精神は無いのかね……。

「まあ、この王国で長いこと続く土地の取り合いの話はおいいて。次の説明をするわね。」

## 第1章 001（後書き）

会話文で終わるってどうなんだろう？と思いました。この辺で区切りますね。

自分の文章力の無さに泣けますorz

次こそはもっと高めな文章力で皆さんに楽しんでもいただけるよう頑張ります。

## 第1章002

彼とモノツクは、一度ホテルを出ると、まずモノツクの言うモノクロタワーに向かう。ホテルからモノクロタワーまでは距離が短く、数分で着いた。

「ほほう。これがモノクロタワーか」

そこには高さおよそ数百メートルはありそうな、巨大な白黒のチエック模様の塔が聳え立っている。

「- こういうのを見て真っ先に探すのは入り口。」

ヒリユウは白と黒の間にあるグレーの扉を見つけた。

「ねえ、あれって入り口だね？入ってもいいのかな？」隣にいるモノツクに尋ねる。

「ダメよ。そこに入れるのは王と妃とあの塔の最上階に住んでるモノクランサーだけだもの。あ。モノクランサーっていうのはね、この世界に生まれ育った者のことをいうのよ」

「- モノクランサー、か。現実世界より、こっちの世界のが面白そうだな。」

「へえ……。それじゃあ入るのは諦めるか。……で、ここに僕を連れてきたというからにはそれなりの話があるからだろう。どんな話かな？」

モノツクの口から語られるこの塔にまつわる話を早く聞きたいのか、ヒリユウはそれとなく急かした。

「それは、今から数年前のこと。一人の少女がこの塔　モノクロタワーにやってきたの。その少女はもちろん、モノクランサー。名前はドメイン。彼女は幼い頃に、あのモノクランス戦争に巻き込まれて、両親と逸れてしまったの。それからしばらく一人でモノクランス王国を歩いて、下宿先を探したの。でも、誰も彼女を泊めようとはしなかったわ。仕方なく街中を歩くことを続けていたら、この塔　モノクロタワーの前に辿り着いたのよ。ドメインは迷わず

その中に入って、中にある階段をひたすら上って、上って上って、上り続けて、最上階を目指したの。最上階に着くと、そこには何故か手紙が置かれてあったの。それは、何も書かれていない、白い紙だったんだけどね。彼女は気にせず、床の上に寝て、一晚過ごしたわ。次の日の朝、目が覚めたら、モノクロタワーの上のほうにある丸い形をした窓に、大きな黒猫の顔があつたの。黒猫は言ったわ。しばらくそこで暮らさない。そうすれば、一人の勇敢な人間が現れる。彼と秘密の契約を結んだ時、君に良い知らせが舞い込むことだろう。って。ドメインはその言葉を信じて、再び眠りに入ったの。その日以来、彼女は今も眠り続けているわ、あなたの到着を待ちながらね」

ヒリュウは頷く。

- なるほど。だんだんと見えてきたぞ。

「どんなモノクランサーなんだろうなあ、そのドメインさん。会ってみたけれど、それは僕がこの王国で大活躍してからなのか。：

よし、わかった」

モノツクが先を歩く。

「じゃあ、次の目的地へ行くわよ」

- 次の目的地にはどんなエピソードが込められているんだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2124z/>

---

モノクロxリンク

2011年12月16日22時54分発行